

「アイアンマン2」 ★★★

2 0 1 0（平成22）年5月20日鑑賞<G A G A試写室>

監督：ジョン・ファヴロー

トニー・スターク（アイアンマン、スターク社社長）／ロバート・ダウニー・J r.

ペッパー・ポッツ（トニーの秘書）／グウィネス・パルトロウ

ローディ（空軍中佐）／ドン・チードル

ナタリー、ブラック・ウィドー／スカーレット・ヨハンソン

アイヴァン・ヴァンコ、ウィップラッシュ／ミッキー・ローク

ジャスティン・ハマー（武器商人）／サム・ロックウェル

ニック・フューリー／サミュエル・L・ジャクソン

ハッピー・ホーガン／ジョン・ファヴロー

ハワード・スターク／ジョン・スラッテリー

2 0 1 0年・アメリカ映画・1 2 4分

配給／パラマウント ピクチャーズ ジャパン

<シリーズ2作目也大ヒットだが>

『アイアンマン』（08年）がエンドクレジット終了後のシーンで予告していたとおり（『シネマルーム20』22頁参照）、『アイアンマン2』が登場したが、その合い間に主演のロバート・ダウニー・J r. が主演した『シャーロック・ホームズ』（08年）が大ヒットしたこともあり、『アイアンマン2』も大ヒットらしい。スターク社の社長、トニー・スタークと秘書ペッパー・ポッツ（グウィネス・パルトロウ）のコンビは健在だが『アイアンマン2』では、新たにトニーの強力な敵としてミッキー・ロークが刑務所から出所したロシア人、アイヴァン・ヴァンコ役で登場するから、その悪役ぶりに注目。またトニーのライバル（?）として、謎の美女ナタリーと、ブラック・ウィドー役の2役でスカーレット・ヨハンソンが登場するから、アンジェリーナ・ジョリーやミラ・ジョヴォヴィッチの向こうを張る彼女のセクシーさに注目！さらにチョイ役ながらサミュエル・L・ジャクソンという大御所も。

この手の映画の場合、1作目よりも2作目の方がよりパワーをアップさせるのが常だが、その王道どおり本作でも、トニーが着るパワードスーツの能力はよりアップされている。また、友人の空軍中佐ローディ（ドン・チードル）が着馴れないパワードスーツを着たり、一撃で金属を真っ二つにする武器「エレクトリック・デス・ウィップ」を纏ったアイヴァン・ヴァンコも強力だから、その激突はよりパワーアップ。「だから面白い」という理屈は私もわかるが、他方でいい加減飽きてくるという面も・・・。

<サム・ロックウェルが狂言回し役で大活躍だが・・・>

『アイアンマン』はアメコミの代表作らしく、主人公のトニーは軍事企業スターク社の御曹司。したがって、「最も強力な武器を作ることが平和への一番の近道」と信じていたのは当然だが、『アイアンマン』後半からその価値観は一変した。したがって、新発明にかかるパワードスーツ「マークI」の誕生秘話は、真面目にじっくり考える必要がある。

他方、『アイアンマン2』で狂言回し役（?）を演じるのが、武器商人ジャスティン・ハマー（サム・ロックウェル）。ジャスティンは国防総省に武器を売り込むためスターク社をライバル視していたから、対抗のためにはどんな手でも打とうとしていたのは当然だ。映画前半、パワードスーツのエネルギー源である、胸に埋め込んだリアクターの毒素濃度の上昇で苦しむトニーの姿が登場し、そこから少しずつ道を踏み外していく（?）トニーの姿が描かれる。そんなトニーの前にロシア人のアイヴァン・ヴァンコが一撃で金属を真っ二つにする武器「エレクトリック・デス・ウィップ」を身につけて登場し、トニーと同等の対決をくり広げる。結果的には何とかアイヴァンを逮捕することができたが、この結果にトニーがひどく傷ついたのは当然だ。ところがジャスティンはアイヴァンの登場に喜び、自社の研究者として彼を迎え入れ、強力な無人兵器ロボットを作らせようとしたが、これがとんでもない結果を招くことになるろうとは？

このように『アイアンマン2』ではジャスティンが狂言回し役で大活躍するが、国防の根幹となる武器の選定をこんなもうけ主義でK Yの男にまかせて大丈夫？韓国の哨戒艦「天安」の爆発と沈没が北朝鮮の魚雷によるものだということがわかった今、国防のための兵器選びをネタにおもしろおかしく楽しんでいてもいいの？

<ハイライトの激突は？>

去る5月11日に観た『春との旅』（10年）は仲代達矢扮するわがまま頑固老人の個性がキラリと光る秀作だった。また5月13日に観た『ザ・ロード』（09年）も少し重すぎたが、父と子の絆を感動的に描いていた。それに対して『アイアンマン2』はこれでもかこれでもかと楽しい映像をみせつけ、物量作戦で観客を圧倒しようというもの。したがって、よりパワーアップしたパワードスーツを着たトニーは、少しすねて（?）トニーのパワードスーツを盗んだローディ中佐と共に、某所からのパソコン操作で操られる陸軍、海軍、空軍そして海兵隊から成る強力な無人口ロボット集団と対決することに。

昔見た内田吐夢監督の『宮本武蔵』全5部作の第4作「一条寺の決斗」では、中村錦之助扮する宮本武蔵が1カ所に留まるとヤバイため、吉岡一門73人を相手に田んぼのあぜ道を走り回りながら目の前の敵を一人ずつ切り倒していく戦法が新鮮だった。さて、2人で多数の無人口ロボットと戦うトニーの戦法とは？また、ここはトニーが開発した新兵器でケリをつけることができたとしても、自分自身が鉄のよろいに身を固めたうえ、さらに強力になった「エレクトリック・デス・ウィップ」をもって登場してきたアイヴァン・ヴァンコとの対決は？

そこをいかに楽しくかつリアルに写せるかがこの手の映画のポイントだが、さてその出来は？ここでも問題となるのは、飽き。筋書きが見える中でも、これは「コミック」と割り切って楽しむことができればいいのだが・・・。